

## 日本の世界貢献

(財)北九州産業学術推進機構  
専務理事  
中村 琢磨  
Takuma Nakamura



### 宗教同志の争い

イスラエルで、血で血を洗う報復合戦が続いている。ユダヤ教徒とイスラム教徒との争いである。カシミールで、イスラム教徒とヒンズー教徒とが殺し合っている。コソボのキリスト教徒とイスラム教徒、セイロンの仏教徒とヒンズー教徒、いずれも宗教同志の闘争である。似たような例は、地球上の至る所で探し出すことが出来る。しかも、その殺し合いの真相は、人間のやる事とは思えない、戦慄すべきものである。

愛や慈悲を説く宗教の信者達が、どうしてこのような残虐行為が出来るのであろうか。色々な解釈はあるが、行き着くところは一神教的信仰である。一神教の信徒にとっては、自らの神だけが唯一の神であり、他宗教は邪宗であり迷信である。他宗教教徒は自分と同等の人間ではなく、殺しても良心の呵責を感じない動物と同等、あるいはそれ以下のものとして、見下す場合さえあるのである。

### 一神教の歴史は新しい

では、かくの如く、世界平和のために有害にも見える一神教的信仰が、有史以来、人類の歴史に君臨してきたのであろうか。否である。人類の歴史に比べると、一神教の歴史は、はるかに短い。

地球上に多くの信者を持つ代表的な一神教、キリスト教、イスラム教について考えてみよう。キリスト教は今から二千年前に、イエス・キリストを始祖として生まれた。イスラム教はもっと新しく、千四百年前にマホメットが創始した。このように、古い一神教でも、その成立をたどれば、今から二千年ほ

ど前に過ぎない。しかも、地域的に広がり、世界性を持って、多くの信者を獲得するためには、その後数百年を要している。

一方、人類の歴史はどうか。現在の人類と同じ種、つまりホモサピエンスの発生は十萬年前と考えられるが、文明らしきものが生まれ、宗教的な感情が発生したのは、遅くとも一万年ほど昔であると推定されている。例えばメソポタミア地方では、その頃から農耕牧畜が始まったことが確認されており、また、豊穡の女神などの土偶や、人の埋葬された墓などが発掘されているからである。

こうした宗教の特徴を一言でいえば、多神教であり、また、他宗教に寛容であったということである。これもメソポタミアの例で見てみよう。六千年前、国造りを始めたシュメールと呼ばれる人々は、最高神、天の神、水の神を中心に、多数の神々を崇拝していた。続いて、アッカド、バビロニア、アッシリア、古代ペルシャというように、次々に新しい国が興って領土を広げていくのであるが、征服者達は、自民族固有の神々に加えて、支配下に入った国家の神々を包摂していったのである。最近の調査によると、バビロニア時代の神々の数は、四千にのぼったということである。

このような事情は、メソポタミア以外の地でも同様であり、一神教の誕生、更に汎世界性の獲得は、割に新しい現象であることが理解されるのである。

### アレクサンダーも古代ローマも多神教で成功した

広大な領土で、異質な多民族の統治に成功した事例としては、オリエントにヘレニズムの花を咲かせ

たアレクサンダー、次に、ヨーロッパ、アフリカ、メソポタミアを含む大帝國を支配した古代ローマが思い浮かぶ。いずれも、西暦紀元前後の時代である。その成功の原因は、優れた統治政策によるといえるが、両者に共通したものとしては、征服地における土着の信仰を尊重したということである。

もともと、ギリシャもローマも、伝統的に多神教であった。当時、既に生まれていたユダヤ教のような一神教の神は、人間に行動規範を与え、それに反すれば罰を与える神であった。一方、ギリシャやローマの多神教の神々は、人間を守り、人間を助ける存在であった。だから、神の数が多いことは、守護する力の多いことであり、歓迎されるべきことであったのである。

そして両者とも、多分、古代ペルシャ、あるいはそれ以前のメソポタミア各国の統治様式を学んだに違いない。寛容な宗教政策こそ、異民族統治の原則であることを、熟知していたのであろう。そのため、領土内の神々は増え続け、特に古代ローマにおいては、遂に30万という途方もない数になってしまった。

ところが、古代ローマは紀元4世紀にキリスト教を国教と定め、他の宗教を邪教として魔女狩りを始める。これを境に、古代ローマ帝國の没落が始まるのである。

## 日本の世界における役割

「文明の衝突」の著者、サミュエル・ハンチントンによると、二十一世紀は、決して「普遍的な文明」の時代ではなく、「八つの文明」の対立の時代であるとする。そして事細かに、ここ数年来の世界各地における戦争の実態と、今後の文明間衝突のシナリオ

を書いているのであるが、その背後からは、殆どの場合宗教、特に一神教的信仰が顔を出している。こうした対立を沈静化し、世界の平和と文明の共存を可能ならしめるためには、宗教間の寛容と協調を求めざるを得ない。

このような分野で、日本は何らかの貢献が出来るのであろうか。確かに日本は、ODAの実績だけでも分かるように、経済的には世界に貢献していることは間違いない。しかし一方では、「エコノミック・アニマル」とか、「小切手振り出し国家」とか、揶揄されているのも事実である。日本が本当に世界から愛され、尊敬されるためには、どうしても文化的な貢献が必要である。しかもそれは、国際社会の価値観や行動に影響を与えるような、思想性や哲学性を持ったものである事が望まれる。そのためには、深く日本の歴史に根ざし、実証性を持ったものでなければならないであろう。

よく言われることだが、日本人は、正月には神社詣でをし、結婚式は教会でやり、葬式は寺に頼んで、何らこだわるところがない。極めて宗教的にルーズに見える。一神教の人々から見ると、唾棄すべき慣習かも知れない。しかし、一面から言うと、異宗教に非常に寛容であることを意味する。しかもこの特質は、日本史の示すところ、縄文時代以来何千年の長きに亘って、日本人のDNAに刻み込まれてきたものである。

前述したメソポタミア文明や、ヘレニズム、キリスト教国教化以前の古代ローマの歴史を考える時、日本の精神史も、現代文明における一つの役割モデルになり得ると考えられる。このような側面から研究してくれる歴史哲学者が、この日本の地に生まれることを、望むや切なるものがある。